

追いかけるトランプ大統領

ジャーナリスト

泉 洋海

11月の米大統領選に向け、民主党

は Wisconsin州ミルウォーキーで、共和党はノースカロライナ州シャーロットでそれぞれ党大会を開催した。民主党はジョー・バイデン元副大統領を、共和党はドナルド・トランプ大統領を、次期大統領候補に選んだ。新型コロナウイルス感染症や人種差別問題など主要テーマへの両陣営の姿勢も明確になり、いよいよ本選に向けた選挙運動が本格化する。



バイデン民主党候補

する。

先に開いた民主党党大会は毎回、候補者をはじめ、元大統領や党の主要人物、党員らが集まり、お祭り騒ぎで来るべき本選への結束を高めていく重要なイベントだ。しかし、今回は同感染症の影響で、バイデン氏やオバマ前大統領らは会場に姿を現さず、各地をオンラインで結んで開催した。

左派取り込み

中道派のバイデン氏が今回腐心したのは、弱みとされる左派の取り込みだ。候補者を選ぶ予備選で、若者らから熱狂的な支持を得た左派のサンダース上院議員の票を逃さないことが本選での勝利の鍵を握るからだ。

前回党大会でヒラリー・クリントン元国務長官が候補者に指名される

と、プーイングが起こり、サンダー

ス氏の支持者が会場から出て行った。会場の外で抗議活動をする人もいたという。オバマ前大統領とクリントン氏が争った2008年予備選も激しい戦いのしこりが残ったが、党内の分断は大きかった。

しかし、今回は違った。サンダース氏が主張する最低賃金の引き上げなどで両陣営が共に作業をして政策提言をまとめた。党の政策要綱には、最低賃金を15ドルまで引き上げるとする項目や、公的保険制度の創設、医療保険制度「オバマケア」の拡充が盛り込まれた。

サンダース氏やその支持者らも、前回の過ちを繰り返したくないとの思いがあったようだ。党大会初日、オンラインで演説したサンダース氏は「私たちは団結してトランプを倒し、バイデンとハリスを正副大統領に選ばなければならない」と反トラ



ミシェル・オバマ前大統領夫人

ンプを鮮明にし、団結と投票を促した。トランプ氏が大統領に選ばれることで自分たちが望む政策がはるかに遠くに追いやられることへの戒めだった。

前大統領夫妻が明確にトランプ氏を批判したことも、今大会の特徴だ。初日にビデオメッセージを寄せたミシェル・オバマ前大統領夫人は、同感染症や、黒人男性が警察官によって不当に殺されたとされる人種差別問題への対応を挙げ「トランプはこの状況に対応できず、わが国の大統

領にふさわしくない」と痛烈に批判。「もたらされるのは分断とカオスで、人ごとのような対応が繰り返されている。選挙でバイデン氏に投票しなければ物事はさらに悪化する」と危機感を訴えた。

前向きなスピーチで知られるミシェル氏が人をこき下ろすのは珍しく、「最も政治的な発言」と話題になっている。後日スピーチしたオバマ前大統領もまた、任期を終えた大統領は後任を批判しないという不文律を破り、「彼はその時間があったのに、大統領にふさわしく成長することはなかった」と切り捨てた。

ミドルクラスジョー

指名を受けたバイデン氏は政治経験こそ44年と長いが、労働者の多い東部ペンシルベニア州スクラントンに生まれ、父親も車のセールスマンという中流階級の出身だ。そんなバイデン氏を人々は親しみを込めて「ミドルクラスジョー」と呼ぶ。気さくで庶民的なところが彼の魅力の1つだ。30歳の若さで上院議員になる直前に、妻と長女を交通事故で亡くす悲劇に遭い、息子2人を育てる

ためにウイルミントンからワシントンD.C.まで電車で通った。子どもも頃、吃音に悩まされ、克服したことで知られる。ただ、失言癖があり、大統領としてはインパクトに欠けるとされた。大統領選も3度目の正直でようやく候補に指名された。

追いかけるトランプ大統領

民主党より遅れて開かれた共和党大会。指名を受け、トランプ大統領は最終日にホワイトハウスで受諾演説を行い、同感染症が流行する前は経済が好調だったことを強調して



ホワイトハウスで受諾演説を行うトランプ大統領

「最高の経済を再び実現する」と訴えた。

一時はバイデン氏がリードしていた支持率だが、ここへ来てトランプ氏がバイデン氏を追い上げ、その差は縮まっている。米紙リアル・クリア・ポリティクスによると、6月下旬の支持率平均はトランプ氏の40・9%に対し、バイデン氏が49・6%と9ポイント近くバイデン氏がリードしていた。また、米ニューヨークタイムズ紙の6月中旬の調査では、トランプ氏が前回選挙で勝利した6つの激戦州でバイデン氏が優勢に戦いを進めていた。

ところが、8月下旬から9月初めのリアル・クリア・ポリティクスでは、世論調査平均はトランプ氏の支持率が42・8%、バイデン氏が49・7%とその差は6・9ポイントに縮まっている。

背景には、人種差別問題に端を発した抗議活動が暴動に発展する中で、郊外に住む白人を中心に多くの人が治安に不安を抱くようになったことがある。先日も中西部ウィスコンシン州ケノーシャで、黒人男性が白人警察官に背後から撃たれ、重体

となった。それをきっかけに、「ブラック・ライブズ・マター（黒人の命は大切だ）」を掲げる抗議デモが広がり、店舗や車の破壊、放火に発展。その後、フェイスブックなどを通じて呼び掛けた「武装自警団」がデモ隊と衝突し、発砲による死者も出た。

トランプ大統領は騒ぎの拡大を懸念するトニー・エバース州知事（民主党）の反対を押し切って現場を訪れ、警察などと意見交換。「平和的な抗議ではなくテロだ」と切り捨てた。銃撃された男性や家族とは会わなかった。トランプ氏は接戦州であるウィスコンシン州などで「法と秩序」を訴え、新たに郊外の白人層に支持を広げたい考えだ。支持率でバイデン氏との差が縮まってきていることを思うと、その作戦はある程度功を奏しているといえる。

日本の新首相が、まず直面するのが新たに誕生する米大統領との関係と同盟深化への方策だろう。どちらが選ばれても、日本が求められる役割は重くなるに違いない。大統領選の行方を注視しつつ日本の役割を考える必要がある。